

## Ⅱ 本研究の目的と手法

育児支援活動は、主として子育ての時期に専業主婦を経験して育児サークルに参加したことのある人たちによって運営されている。地域で活動する小規模のサークルでは、自分の子どもの子育てにまつわる問題を解決するために行政などが主導する催しに集まってきた人たちだけで運営されているところもあるが、子どもは「卒業」しても、サークルの運営に力を尽くしている人もある。子育てにおける「共同―支えあいの場」の形成過程に注目して研究を進める中で、サークルの運営に関わるようになることが社会を運営していく一員としての自覚がもてることにつながっていくことを実感してきた。本研究は、サークル活動の運営をになっている人たちが、どのような思いで人生を送り、これからを見つめているのかを、大人としての「社会参加」へのスタンスのありようから明らかにし、専業主婦経験者の大人としての発達の道筋を考える手がかりを得ることを目的にして取り組まれた。

子育てという時期に専業主婦を選択した人生を過ごしている人たちからの情報が少ないことも気がかりのひとつであった。孤立し、不安を抱えているので援助の手が必要だという色合いのものが多すぎる。大人として育っていない親ばかりということはないはずだという思いも大きかった。

「大人としての発達」に対するわれわれの基本的な視線は、自分だけではできないことをお互いに助け合いながら実現するという相互性の自覚(自立的判断)と、仲間との相互作用の中で「自分も相手も変われる」という実感と認め合いが、社会の中の一員として「大人になる」ことにつながっていくという方向に向けられている。

「共同―支えあいの場」への参加の経験を積み上げてきたやまがた育児サークルランドのスタッフからの貴重な情報を、子育て支援の場での大人の発達をとらえるというわれわれの大きな目標への第一歩として役立てていきたい。

さらに、このテーマでの研究に協力をお願いした時、「私たち自身も、やってきたことで何が変わったのかを実感する機会になる」といって快諾された皆さんの姿をとらえることをとおして、一緒に考えていけるようになることも大きな目的なのである。

(文責：高木和子)

## 本研究の全体的手法

本研究では運営参加者の現在の運営実態と「あ〜べ」に出会うまでの彼女達個々人の育ちに関する調査を通して、「大人」としての育ちについて検討したいと思う。彼女達の取り組みは、我々調査者にとってまさに、「大人」としての発達の一面として捉えることができた。なぜなら、彼女達の運営する育児サークルランド「あ〜べ」は個々の育児サークルどうしをつなぐことを通して「支えあう仲間の輪」を広げようとするだけでなく、このような育児支援活動の運営力を次世代に伝えることに重きをおいているからである。こういった育児支援活動を通した「社会力」の育成を思わせる方針を生み出した彼女達の背景にはいったい何があるのだろうか。彼女達は「あ〜べ」と出会うまでにどのような体験や社会参加経験をし、その過程でどのような価値観を形成し活動の原動力を養ってきたのだろうか。このような彼女達に対する多くの問いは、育児支援活動を運営するに至るまでのプロセスを知る手立てとなるだけでなく、「大人」としての発達の契機、「大人」としての育ちを示唆することができるであろう。

**調査対象者** NPO 法人やまがた育児サークルランドの運営に携わるスタッフ 15名。全員女性で年齢は30代～50代。

調査時期 2004年6月～8月

## 調査全体の手続き

本研究の調査手続きとしては、まず運営参加者に対する質問紙を用いた予備調査を行った上で半構造化面接法による聞き取り調査を行うことにした。これは、本調査での聞き取りを行う前に、あらかじめ運営参加者に関する情報を得ておくことで本調査ではどのような質問項目を設定し、何にポイントをおいて聞き取りを行えば良いのかを検討するためである。以下に予備調査及び本調査の具体的な手続きとその内容について示す。

### 1. 予備調査 (質問紙)

実施期間 2004年6月～7月初旬

#### 手続き

郵送により予備調査用紙を配布し回収した。以下に予備調査の手続き内容を詳細に示す。

#### 1) 予備調査での質問項目の選定

予備調査では、本調査に向けてどのような質問項目が必要であるか、どのような質問を具体的に掘り下げて聞く必要があるかを検討しながら質問項目を設定した。しかし、予備調査をする前段階では、調査対象者から返答される内容は予測できないので研究者個個人の視点から「大人」としての育ちに関連するであろうテーマも含みこんだ質問項目もいくつか設定した。それらのテーマとは、“参加様態の発達プロセスの仮説”“成人のアイデンティティ発達”“効力感と達成感イベント”である。

“参加様態の発達プロセス”とは、運営参加者の参加様態に注目し、それを「大人」の発達を捉える1つと仮定し、参加様態が移行する要因を考察することで「大人」の発達を促がす要因や条件を検討しようと考えたものである。

“成人のアイデンティティ発達”は、参加者の持つアイデンティティの形成過程には何が影響していたのかを考察し、形成されたアイデンティティによって参加者の人生がどのような道のりをたどってきたのかを分析しようというものである。

“効力感と達成感イベント”は、運営参加者が積極的に運営に携わる背景には、彼女達の持つ効力感が関連しているのではないかと仮定し、効力感の形成要因として考えられている達成感（制御体験）に関する出来事には過去どのようなものがあったかを検討するというものである。

以上のテーマも含みこんで質問項目を選定した結果、予備調査での項目は12項目となった。12項目とは①生育暦に関する項目、②社会経験の有無に関する項目、③価値観に関する項目、④活動の評価に関する項目、⑤土地への愛着に関する項目、⑥活動参加様態・参加年数に関する項目、⑦その他の地域活動に関する項目、⑧活動と家庭との両立に関する項目、⑨活動の位置付けに関する項目、⑩達成感を感じた出来事に関する項目、⑪社会問題への関心に関する項目、⑫活動を経験したことによる大人としての育ちの実感に関する項目である。各質問項目における下位項目については次のページの表Ⅱ-1に示している。また、予備調査で用いた質問紙の詳しい内容は資料を参照のこと。

表Ⅱ-1 予備調査での質問項目

①生育暦に関する項目	居住年数
	山形市居住のきっかけ
	出身地
	学歴
	家族形態
②社会経験の有無に関する項目	仕事をした経験
	職種
	期間
③価値観に関する項目	現在の自分を支えている言葉
	価値観の形成に影響を与えたもの
	結婚観
	結婚後の仕事観
	結婚前の価値観に影響を与えたもの
④活動の評価に関する項目	子育て観
	子育て後の仕事観
⑤土地への愛着に関する項目	活動への満足度
	満足度の理由
⑥活動参加様態・参加年数に関する項目	土地への愛着度
	他の土地への移住希望の有無
⑦その他の地域活動に関する項目	参加様態
	参加期間
⑧活動と家庭との両立に関する項目	地域の活動への参加経験
	子どもの年齢
	活動開始時の子どもの年齢
	活動と育児の両立
	現在の活動と育児の両立
	育児の仕方の変化
	変化の内容
子どもへの期待	
⑨活動の位置付けに関する項目	活動時間
	活動の位置付け
	家族の理解
⑩達成感を感じた出来事に関する項目	達成感イベント(小・中)
	達成感イベントの内容
	達成感イベント(高・大)
	達成感イベントの内容
	達成感イベント(社)
⑪社会問題への関心に関する項目	達成感イベントの内容
	関心のある社会問題
	社会問題に対して自分が出来ること
⑫活動を経験したことによる大人としての育ちの実感に関する項目	社会問題への貢献の実感
	大人としての育ちの実感

## 2) 予備調査結果による本調査に向けての項目の選定

予備調査用紙を郵送により配布し、回収した結果、運営スタッフ 15 名のデータを得ることができた。予備調査の結果では、15 名の全員に社会参加経験があり、その仕事内容は大きく“事務系の仕事”と“保育系の仕事”に分けることができた。本調査で行なう聞き取り調査は、運営参加者の社会参加経験と人生における選択のありかたを中心に聞き取ることを軸に考え、質問項目を取捨選択することにした。予備調査では、どの時点において何の理由から仕事を辞めたのか、また何がきっかけで育児支援に関わるようになったのかなど、意思決定に関する項目が不足していた。そこで、人生における選択のありかたについて詳細に聞くために、新たに質問項目を増やした。増やした項目内容は、i 両親の仕事、ii 就職のきっかけ、iii 育児サークルの経験、iv 「あーべ」参加のきっかけ、v 退職のきっかけ、である。次に、生育暦について現在の実態から過去へとさかのぼって幼少時代の育ちについて聞けるよう、vi 子ども時代の様子の項目を新たに設定した。さらに、活動を運営してゆく上で課題となる“活動と家庭の両立”に関するさらに詳しい項目として、運営スタッフが具体的にどのような両立のためのロジックを持って活動に携わっているのか尋ねるために、vii 家族と自分の優先順位、を設定した。この項目を設定した背景には、育ちあう個と集団の相互作用過程の視点から、自分（個）と家族のどちらを優先するかという考えた方の中に「大人としての発達」の特徴が表れるのではないかと考えたことも含まれている。結果として新たに加えた項目は、i 両親の仕事、ii 就職のきっかけ、iii 育児サークルの経験、iv 「あーべ」参加のきっかけ、v 退職のきっかけ、vi 子ども時代の様子の項目、vii 家族と自分の優先順位、である。逆に④土地への愛着に関する項目、⑥その他の地域活動に関する項目、⑩社会問題への関心に関する項目は、本調査には含めないこととした。

## 3) 新しく加えた質問項目と予備調査項目の組合せ

取捨選択して残った予備調査の項目と新たに加えた項目とを組合せ、以下の質問項目を設定した。①生育暦に関する項目・i 両親の仕事・vi 子ども時代の様子、②社会経験の有無に関する項目・ii 就職のきっかけ・v 退職のきっかけ、③価値観に関する項目、④活動の評価に関する項目、⑥活動参加様

態・参加年数に関する項目 +iii 育児サークルの経験、⑧活動と家庭との両立に関する項目、⑨活動の位置付けに関する項目 +iv 「あーべ」参加のきっかけ、⑩達成感を感じた出来事に関する項目 ⑫活動を経験したことによる大人としての育ちの実感に関する項目、vii 自分優先か家族優先かに関する項目、である。組み合わせた本調査での質問項目内容については以下に表で示す。また、これらの質問に関して詳しく聞き取れるよう、さらに掘り下げた下位質問も加え面接調査記録票を作成した。

## 2. 本調査

表Ⅱ-2 本調査での質問項目

①生育暦に関する項目、	居住年数 山形市居住のきっかけ 出身地 学歴 家族形態
* 新しく加えた項目	i 両親の仕事 vi 子ども時代の様子
②社会経験の有無に関する項目、	仕事をした経験 職種 期間 退職のきっかけ
* 新しく加えた項目	ii 就職のきっかけ v 退職のきっかけ
③価値観に関する項目、	現在の自分を支えている言葉 価値観の形成に影響を与えたもの 結婚観 結婚後の仕事観 結婚前の価値観に影響を与えたもの 子育て観 子育て後の仕事観
④活動の評価に関する項目	活動への満足度 満足度の理由
⑥活動参加様態・参加年数に関する項目	参加様態 参加期間
* 新しく加えた項目	iii 育児サークルの経験、
⑧活動と家庭との両立に関する項目、	子どもの年齢 活動開始時の子どもの年齢 活動と育児の両立 現在の活動と育児の両立 育児の仕方の変化 変化の内容 子どもへの期待
⑨活動の位置付けに関する項目、	活動時間 活動の位置付け 家族の理解
* 新しく加えた項目	iv あーべ参加のきっかけ
⑩達成感を感じた出来事に関する項目、	達成感イベント(小・中) 達成感イベントの内容 達成感イベント(高・大) 達成感イベントの内容 達成感イベント(社)
⑫活動を経験したことによる大人としての育ちの実感に関する項目	達成感イベントの内容
* 新しく加えた項目	大人としての育ちの実感 vii 自分優先か家族優先かに関する項目

**実施期間** 2004年7月下旬～8月初旬

**手続き** 運営参加者の15名に対し半構造化面接法を個別的行なった。その際には面接調査記録票を用いて記録した。また、調査後に内容を掘り起こす為小型のカセットレコーダーを用いて録音をした。インタビュー終了後、成田・下仲・中里・河合・佐藤・長田（1995）による特性的自己効力感尺度を用いた質問紙に答えてもらった。1人あたりの聞き取り時間（質問紙の記入時間は除く）概ね1時間と考えたが、同じ質問をした場合でも調査者の話す内容量は人によって差があった為、最低20分から最高1時間半と聞き取り時間には個人差があった。

聞き取り調査での質問項目の順は、調査対象者が話しやすいように考慮した。まず、インタビューを行った順の早い調査対象者を参考にあらかじめ作成した質問項目順をベースに聞き取りを行った。その結果、インタビューでの話しの流れを作るきっかけとして生育暦に関する項目として設定した“居住場所”や“居住年数”を最初に確認しながら、これまでを振り返って今現在に至る状況を語ってもらうことにした。その後、「あ～べ」に参加するようになったきっかけを聞く質問を皮切りに、現在の参加様態やそれ以前の参加様態について、参加様態が変化したきっかけなど予備調査では得られなかった情報を得る質問を試みた。以下に最終的に決まった質問の順番と手順を示す。

## 質問の順番

### 1. 話しの流れをつくる質問

運営参加者の居住場所について聞く。その際に、幼少期から現在に至るまでの居住場所の変化（その理由も）を聞くことを通して、運営参加者が過去を振り返りその後の質問に答えやすいよう配慮した。

例) ○○さんは現在○○に住んで居られるそうですが、以前からずっと○○に住まれているのですか。

### 2. 活動に関する質問

現在の活動参加様態や活動の位置付けについて聞く。また、活動に関わるようになったきっかけをたずね、現在に至る活動参加様態の変遷についても語ってもらう。

例) どのようなきっかけから「あ〜べ」で活動されるようになったのですか。

例) ○○さんは、今○○として活動に参加されているそうですが、活動当初から○○の形で参加していらしたのでしょうか。

例) ○○さんの活動は、時間的には生活の中でどのぐらいの割合を占めていますか。また、精神的にはどれぐらいの割合を占めていますか。

### 3. 活動と家庭との両立に関する質問

活動と家庭との両立やその方法についてきく。

例) 活動をしながら、家事・育児の両立は大変ではないでしょうか。

例) 活動と育児をどのように両立させていますか。

例) 活動に対してご家族はどのように受け止めていますか。理解はありますか。

### 4. 仕事経験に関する質問

前職の仕事内容やそこで働こうと思ったきっかけや理由、さらに仕事観にまで話を広げてきく。また、いくつか仕事が変わったケースの調査対象者に対しては、その経緯も踏まえてきく。

例) ○○さんは、以前○○をされていたそうですが、なぜその仕事に就こうと思われたのですか。また、具体的にはどのようなことをされていたのですか。

例) 予備調査の質問の中で“結婚しても仕事を続けたい”という答えでしたが、それは何か出来事や誰かの影響があったのでしょうか。

### 5. 達成感イベントに関する質問

幼少時代のどんな子どもであったかをきく。そして、小学校時代から学生時代を経て社会人となり、「あ〜べ」の活動に関わる現在までの達成感イベント（達成感を感じた出来事）についてきく。（予備調査の中で無いと答えた人に対しても、もう一度たずねてみる。）この質問の冒頭では、現在「あ〜べ」で活動されている方々が過去はどのような子どもで、どのような経験や体験を経て今に至るのかを知る為にたずねていることを伝えた。

例) 幼い頃、○○さんはどのような子どもでしたか。

例) ○○さんは小・中時代に○○に関する達成感イベントがあったそうですが、もう少しその内容についてお話しただけではないでしょうか。

## 6. 自分と家族の優先順位に関する項目

自分と家族のどちらを優先するかについてきく。

例)「あなたがやりたいことをやっていくこと」と「家族全体としてうまくやっていくこと」とどちらが大事ですか。家族の都合とあなたのやりたいことをどう折り合いをつけていますか。考え方ややり方について教えてください。

### 聞き取り調査後実施した尺度について

成田・下仲・中里・河合・佐藤・長田（1995）による特性的自己効力感尺度は、特性的自己効力感を測定するために、シェラーら（1982）が作成した自己効力感尺度（SE 尺度）の邦訳版である。原尺度は、①「行動を起こす意志」、②「行動を完了しようとする意志」、③逆境における忍耐」などの全 23 項目から構成されている。この尺度を用いたのは、活動運営参加者の「社会参加」の原動力として自己効力感が関連しているのではないかと考えたからである。尺度の詳細な項目内容については資料を参照していただきたい。

（文責：常光 真梨子）